

日本語学習者を対象としたライティングセンターについての一考察 —ライティングセンターの視察から—

A Consideration of Writing Center for Japanese Learners: Through Interview Researches with Writing Centers

伊藤 創*

Hajime ITO

抄 録

日本におけるライティングセンターの歴史はまだ浅く、特に留学生に対するライティング支援を実施しているところとなるとその数は更に限られたものになる。本稿では、この後者のライティングセンターでの聞き取り調査から、今後の同センターにおける留学生の支援のあり方を考察した。その中で、アメリカで培われたライティングセンターに関する理念を継承することは重要であるが、その一方で、日本の教育事情、あるいはそれぞれの大学の特質等に合わせて、センターの運営方法や理念を決定していくことが重要であり、そのためには、ライティングセンターの理念や役割を再考することも時には必要であり、また書き手だけでなく、チューター側の教育効果も考えることも重要であることを指摘する。

1. はじめに

現在、我が国では少子化と進学率の増加によって高等教育の「大衆化」が進行し、大学は以前よりもはるかに多様な学生を受け入れることとなっている。同時に、「留学生 30 万人計画」に象徴されるように、国策として更なる留学生の受け入れ促進も進められており、このような国内外の別を問わない多様な人々に対する大学への門戸の開放の結果、入学生の入学前に身につけているべき基礎的な学力、学びに対する動機などに大きなばらつきが生じ、これまでのような高等教育の水準が保てないという事態が多く大学の起こっている。

このような状況に対して、リメディアル教育、初年次教育、サプリメント・インストラクションなど（いずれも後述）の正規課程内外での様々な学習支援が行われているが、入学後、学問的にも社会的にも大学に統合していく必要のある（Tinto1975）学生たちの中でも特に、言語的・文化的な差異というその統合を阻む壁を乗り越えなければならない留学生の増加にあたっては、これらの支援を、更に彼らに特化した形で充実させる必要も生じてくる。

* 関西国際大学共通教育機構 教育総合研究所学内研究員

本稿ではこのような状況に鑑み、今後更なる増加が見込まれる留学生たちに対する学習支援として、彼らのライティングの能力の向上を支援するための（現在、多くの大学でその設置、あるいはその検討が進められている）「ライティングセンター」という学修支援体制（機関）をとりあげ、考察を行いたい。

2. ライティングセンターによる支援

2.1 ライティングセンターとは

「ライティングセンター¹」とは、学生のライティング能力の向上を正課外で支援する機関である。松田（2012）によれば、2011年時点では、国内の大学に15のライティング支援機関が存在しているが、その多くが日本人学生の日本語文章あるいは英語文章のライティングを対象としたもので、留学生の日本語でのライティングを対象に支援を実施しているのは、首都大学東京、龍谷大学、麗澤大学、早稲田大学の四つである。これらの四つの大学に加え、松田氏自身の金沢大学のライティングセンターも同様の支援を行っていたが²、このような留学生を対象とした（対象に含む）ライティングセンターは、まだ日本国内には少なく、その運営のあり方もまだ確立されたものがあるとは言いがたい。

しかし、先にも述べたように今後更なる留学生の増加が見込まれる中、ライティングセンターのように正課外で彼らの日本語学習を支援する体制の充実は喫緊の課題である（実際、日本国内のライティングセンターとして先駆的な存在である早稲田大学を訪れた際には、筆者の他にも多くの大学関係者が視察に訪れていて、その関心の高さが伺えた）。筆者は、早稲田大学に加えて、麗澤大学、首都大学東京の三つを訪れ、聞き取り調査を行ったが、そこで得たそれぞれの特色のある支援体制のあり方等の情報やこれまでのライティングセンターの発展の経緯などに鑑み、今後のライティングセンター（支援）のあり方や可能性を考えたい。

以下では、まずライティングセンターの基本的な理念やあり方などを述べた後、実際に視察させて頂いた留学生へのライティング支援を実践している三機関の運営状況などを述べる。

2.2 ライティングセンターの基本理念

日本では、ライティングセンターは比較的新しいシステムであるが、アメリカでは、その原型となる支援システムが1950年代から存在し、（一時はその停滞をみるが）、60年代から再度その重要性が認識され、1970年代から定着、現在ではアメリカのほとんどの大学に設置されている（佐渡島2009, 2013a）。ライティングセンターは、およそ「大学生や大学院生であるチューターとの1対1の対話を通して学生が自立した書き手になることを目指した機関（松田2012:60）」と定義でき、そのライティング指導には、（その規模や実施形態に違いはあっても）、基本的には、以下の三つの

¹ 各大学で「ライティング支援室」など他の名称もあるが、ここではこうした書くことを正課外でサポートする機関をまとめて「ライティングセンター」として呼ぶことにする。

² 2010年に発足しているが、同機関は、期限付きの運営であったそうで、筆者が2013年度に調査の依頼をした際には、その活動を終えていた。

基本理念が通底している（以下は、佐渡島（2013a）の記述を筆者なりにまとめたものである。詳細は同書を参照されたい）。

Writing as a Process

アメリカにおけるライティングセンターの発展には、1980年代に広がった Writing as a process 運動が大きく寄与しているという。これは、ライティングをその〈過程〉において指導しようというもので、ライティングセンターでは、完成した文章ではなく（もちろん、その推敲の場としても機能するが）、まだ構想の段階、あるいは下書き段階にあるときから、個別面談やグループ面談が定期的にはさんでいく。すなわち、書く過程に他者が介入することによって、書き手が考えを修正しながら書くことの有効性を重視するのである³。

Tutoring, not Editing

上記の書く過程を指導する、という考え方は、文章ではなく、書き手を良くする、Tutoring, not Editing という理念と表裏一体のものである。つまり、ライティングセンターは、〈添削〉を行う場所ではなく、「書き手が独りになったときも自分で文章をよりよく直せるように、その方法を指導する（佐渡島 2013a:8）」場所なのである。そのため、同センターの指導では、書き手とチューターとの〈対話〉が重視され、その対話を通じ、文章を検討する中で、書き手が、自らの文章の問題に〈気づく〉ことが重要視される。そして、最終的には、書き手自身が書くことの全てに責任を持つこと、より具体的には「書くことの計画（構想、書く、書き終わり）を行い、書き進める中で自己の文章の問題点に気づき、問題を改善する方法を選び、文章の評価をすること（松田 2012:62）」ができる「自立した書き手」の育成を行うことが、ライティングセンターの目的とされる。

Writing Across the Curriculum

さらに、ライティングには専門領域の枠を超えて共通する問題があり、従って、ライティングセンターでは学問領域に限定されない指導がなされるべきであるという Writing Across the Curriculum という理念も同機関の指導を支えるものである。これは、裏を返せば、チューターが指導する文章の専門分野に精通している必要はないということであり、むしろ、書き手とは専門分野が異なるチューターに対話を通じて書き手が自らの文章の意図を伝える中で、改善点に気づくことも多々あるのである。このことから、センターでは複数の異なったチューターによる指導も奨励される。

3. 日本国内のライティングセンター

さて、米国ではほとんどの大学でライティングセンターが設置され、上記のような理念のもとに

³ 従って、ライティングセンターで行う「指導」とは、何かを教え修正する、という上からの立場のものではなく、共に考える、という行為に近い。

学生のライティングへの支援が行われているが、現在の日本国内のライティングセンターはまだまだ発足したばかりのものが多く、こうした理念は踏まえつつも、各大学がそれぞれの特徴や資源の現状などに応じて、様々な形態でライティングセンターを運営し、よりよい形を模索しているというのが現状であろうと思われる。

その中で、2004年の設置以来、国内のライティングセンター（あるいはその設置を考えている全ての教育機関）にとってそのモデルとなっているのが早稲田大学ライティングセンターである（また同センターについて、その活動理念からチューターの育成方法までが詳細に記された佐渡島（2013a）も、センターと共に現在の日本のライティングセンター設置に際してのバイブル的な存在となっていると言っても過言ではない）。同センターでは、様々な研究分野を背景に持つ大学院生がチューターとなり、専門領域にとらわれないライティング指導が行われている。また書き手が第二言語で文章を作成する場合にも、様々な形態での指導が提供されていて、例えば日本語母語話者が第二言語である英語で書いた文章について指導を受けたい場合、英語による指導か、日本語による指導かが選択できたり、あるいは、日本語を第二言語として学ぶ留学生が日本語で書いている場合には、日本語教育専門のチューターからの指導を選択したりすることなども可能である。そして第二言語で書かれた文章に対する指導も、（当然ながら）文法・語彙・表現の修正といったネイティブチェック、すなわち添削ではなく、内容を共に考え、書き手の責任で文章を作りあげていくというライティングセンターの基本理念に基づいて行われる。

さらに同センターには、チューター採用から実際の指導にあたるまでの厳しいチェックと育成過程が確立されており、また実際にチューターとして指導にあたるようになってからも、チューター達の定期的な研修会が行われる。そこでは、より効果的な指導のあり方や、より多くの学生に同センターの更なる利用を促すための方策⁴などが、先輩チューターから新人チューターへ伝達されたり、また共に練られたりしている。この研修会は、基本的にはチューター主導で行われ、チューター達には、チュータリングの時間はもちろん、学生が来ないセンター待機の時間、またこの研修の時間にも謝金が支払われる。

このように、早稲田大学ライティングセンターは、米国で発展してきたライティング支援の理念を受け継ぎ、その実現のために、日本ならではの（あるいは同大学ならではの）様々な制約を乗り越えるための様々な独自のアイデアが盛り込まれている。先にも述べたように、現在は、同センターを一つのモデルとして、それに追従する形で、徐々に全国の教育機関にライティング支援を行う機関の設置が進んでいる状況であるが、特に留学生対象のライティングセンターの普及はそこから更に遅れをとっているのが現状である。当然、そのような支援を行っているライティングセンターの運営の実践報告や支援に関する研究も非常に少なく（正宗 2012）、まだ国内に数少ない留学生に対する日本語ライティング支援の機関は、それこそ試行錯誤の連続でそのシステムの確立に向けて少しずつ歩を進めているといった状況にある。このような中、それぞれの大学が、その規模や資源の

⁴ 筆者視察した2013年時点では全学生の3%が同センターを利用しており、これを4%に上げるのが当面の目標だということである。

制約、あるいは特徴を背景に（多くの場合は前者の要素が大きい）、独自の形態でライティングセンターを運営しているが、以下では、筆者が視察させて頂いた麗澤大学、首都大学東京のライティングセンターでの聞き取り調査などで得た情報などを加え、留学生を対象としたライティングセンターその現状と課題を見たい。

4. 留学生対象のライティング支援の課題

4.1 チューターの確保

上記のいずれの大学でも最も大きな課題として上げられたのが、チューターの確保である。ライティングセンターでは、その理念から言えば、様々な学問分野において、かつ構想段階にある初年次のレポートから専門分野の高度な論文まで、全ての学生のあらゆるライティングに対して支援が行えるのが理想的である⁵。

しかし、こうした支援には、数多くの優秀なチューター、すなわち大学院生の存在が前提となるが、そもそも大学院を設置していない大学や、またあったとしても、特定の学部のみでの設置で、とても全学の学生をカバーするようなチューターの確保は期待できないという場合もある。また大学院生であれば、自らの将来に鑑み、教育、指導に携ろうという意識が高いが、そうでなければ、チューターとして時間を拘束するには何らかのインセンティブが必要となる。しかし、例えば彼らに報酬を支払おうにも、留学生用のライティングセンターの設置の必要性もまたその効果も十分に周知されていない中では、そのような予算を確保することもなかなか現実的ではない。

また、ライティングセンターの本来の主旨からすれば、文法や表現のチェックはその主たる目的ではなく、書く過程を支援する、すなわち内容を共に考えることが重要なのであるが、特に留学生の指導ということで、日本語教育、日本語学といった分野の専門的な知識が必要なのではないか、という不安もチューター確保の際の大きなハードルになっているという。

こうしたチューターの確保に関して両大学では、日本語教育や異文化交流に興味のある外部のボランティアによる人材を活用し対応している。例えば、麗澤大学では、同大学の生涯学習プログラム「ROCK（麗澤オープンカレッジ）日本語支援ボランティア講座」の受講生の中から、ライティング支援室のボランティアTAに関心を示した地域の人々を、チューターとして採用している（正宗2012）。

4.2 稼働率の維持

上記のチューターの確保と平行する課題が、センターの稼働率の維持、つまり利用者の確保である。チューターをセンターに常駐させ、そこに一定の報酬を与えるためには、当然、一定の利用者の来訪が見込めなければならない。また、ライティングセンターの利用をより日常的なものにするためには、予約なしの飛び込みであっても、その利用を受け入れる体制は整えておく必要がある。

⁵実際、早稲田大学のライティングセンターは、大学初年次生から教員までをその支援の対象としている。

しかし、例えばその利用を義務化していない首都大学東京のライティングセンターなどでは、他の専門科目の教員などを通じて様々な告知を行い、センターの利用を留学生に促しても、なかなか来訪者は（一定の数以上には）増えないという。同大学が留学生におこなった聞き取り調査によると、まず留学生にとってハードルになるのは、このような状態でセンターを訪れても良いのだろうかという書いたものに対する自信の無さであるという。また添削の場ではないというライティングセンターの理念を前面に出した結果、よりいっそう、まだ内容を練り上げる段階にはないという消極的な態度が生じてしまうという。

こうした利用者の確保に関しては、授業との連携によるセンターの義務化がなされている場合には生じない。特に留学生に特化したライティングセンターの場合は、まず必修の日本語科目との連携がその後の自発的なライティングセンターの利用の促進にも有効であろう。

また、利用を義務化していない場合でも、留学生対象のライティング支援の場合は、一定程度はネイティブチェック、つまり添削を求めての利用を許容するというのがその利用率アップの一つの手であろう。あるいはレポートやプレゼンテーションの資料に限らず、各種申請書類等の日本語チェックの場としての利用を可能にしても良い。こうした利用をきっかけに、より書くための思考を鍛える場所としての利用に繋がっていく事は多いに考えられるからである。

4.3 センター利用の質の転換

そして、上記のような授業との連携や、ネイティブチェックや書類作成の支援の場としてのいわば入り口、お試しとしての利用を、如何に自主的で、より内容の指導に重点をおいた利用にもっていくかも大きな課題である。また留学生が、書く事につまずいたり、より良い文章にしたいと思ったりした際には、常にセンターの利用がその選択肢になるように、つまり如何に彼らをリピーターにするかも課題となる。

授業との連携によるセンター利用の義務化は、当然、全ての日本語科目でできるわけではなく、またライティングセンターの本来の主旨からすれば、むしろ日本語科目などではなく、自らの選択した学問領域のレポート作成等を支援するのがより望ましいからである。このような体制が整えば、書き手だけでなく、チューターも学ぶことが多くなり、センターの大学教育に果たす知的貢献度もさらに大きなものとなるだろう。

このようにライティングセンターを実際に機能させるためには、乗り越えなければならないいくつかの壁があるが、これらについて考える場合には、そもそものライティングセンターの位置づけ、あるいは役割を見直すことも必要であると考えられる。以下では、本稿の締めくくりとしてこの点を考察し、今後のセンターのあり方、可能性について考えたい。

5. ライティングセンターの位置づけ

ライティングセンターは、正課外の学修支援を担うシステム一つであり、それは日本語学習者を

対象とする場合も同様である。そして、このような正課外の支援が必要となった背景には、吉田ら (2010) で指摘されるように、多様な学力の学生を受け入れざるを得なくなったという現在の日本の大学事情がある（これはアメリカのライティングセンター設立についても同様である、）。

この学力の多様さは、留学生の日本語力にもあてはまり、日本語力が大学での学びに十分ではない場合の支援（例えば日本語科目と連携した文法や作文の課題等の支援）の必要性が更に高まっている。こうした支援の場としてライティングセンターが機能する場合には、それは同センターが「リメディアル教育」の一部を担っていることになる。「リメディアル教育」とは、大学教育を受ける前提となる基礎的知識などを大学生が入学前後に学び直す、いわば〈補習教育〉であり、留学生たちが日本語力の〈不足分〉を補うために利用する（させる）場合には、ここに位置づけられることになる。

しかし、同じ日本語科目と連携したセンターの利用の場合でも、例えば、その日本語科目が「アカデミックジャパニーズ」の獲得を目的としたものである場合には、ライティングセンターは「初年次教育」の一部を担っていることになる。「アカデミックジャパニーズ」とは、日本留学試験で測られるような留学生だけに必要とされるものではなく、日本人学生もその獲得が求められる、〈日本の大学での勉学に対応できる日本語力〉である。すなわち、文献を正確に読み取り、プレゼンテーション、ディスカッション、レポートなどにおいて、自らの考えを論理的に自らの言葉で表現できるような日本語力である。佐渡島 (2013b) で指摘されるように、大学初年次生の多くは、入学以前に文章を書く経験が非常に乏しく、多くの文献を読んだうえで立場を構築するという指導、文献を参照する仕方、提示する仕方に関する適切な指導も受けていない。もちろん、文章の種類ごとにある書き方の特徴なども十分に理解していない。アカデミックジャパニーズはこうしたスキルを含めた日本語力を指すものであり、リメディアル教育の「本来高校までに習得すべき内容の教育（山田 2003）」には含まれない。補習的な内容ではなく、「これから大学で学ぼうとしている学生が、大学という新しい教育・学習環境に適応するために必要とされる最低限の知識やスキル（安永 2006）」であり、従って、入学以前には学んでいなかった新たな内容の習得を目指す「初年次教育⁶」の範囲にあるものと考えるのが自然であろう。

この初年次教育の一部としてのアカデミックジャパニーズの獲得の支援に続くライティングセンターの役割としては、「サプリメント・インストラクション」の一部を担うような支援があげられるだろう。加藤 (2013) によれば、「サプリメント・インストラクション」は、難度が高く、D（不十分）か F（不合格）の成績を取る受講者が一定の割合以上に出してしまうような授業科目に的を絞った「学生主導の課外学習支援プログラム」と定義される。このサプリメント・インストラクションは、ハイリスクな授業を抽出し、前年度までにそれらの授業で優秀な成績をとった学生が、トレーニングを受けて指導員として入ることで、この運営される。このような高度な授業において、その内容のより深い理解をサポートしながらライティング支援を進めていくような場合、ライティ

⁶ 「高校（と他大学）からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」川嶋 (2006)

ングセンターはサプリメント・インストラクションの場としての機能を担うことになる。この場合に行われるライティング支援は、よりその本来の理念に近いものと言え、留学生と日本人学生が、(先のアカデミックジャパニーズ獲得のための支援よりもさらに)近い立場で利用することとなる。

また、就職活動時における自己PRなどを(添削ではなく)共に考え、作成する場合などは、ライティングセンターはキャリア教育の一端を担うことにもなる。

このように、ライティングセンターは、表現の拡充や文法事項の導入から読解要約といった大学での学びに最低限必要な日本語力の獲得の支援(リメディアル教育)から、アカデミックジャパニーズ獲得の支援(初年次教育)を担うこともでき、更には、より高度なサプリメント・インストラクション、キャリア教育などを担う機関としても機能する。そして、これらのどの側面に最も重点を置くかによって、その運営方法は変わってくることになる。

例えば、留学生の日本語の添削の支援を主とする場合、日本語教育や日本文化などの学科やコースを持つ大学であればそのコースの受講者、あるいは英語教育や外国語専攻の学生などがいれば彼らがチューターとして多いにその力を発揮するであろう。ライティングセンターのチューターは大学院生が多いが、上記のような指導の場合は、学部生でも十分その役を果たしうるし、またチューターにとっても、自らが専攻する学問領域の学びに寄与する経験となる。その意味では、書き手のセンター利用だけではなく、チューターとしての活動も、(例えば日本語教育や英語学といった)授業の受講者に義務化することも可能であろう(また今後、文部科学省事業「国際化拠点整備事業(大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業)」通称「グローバル30」で進められてきたような、英語だけで学位がとれるようなプログラムが増加していくならば、より基礎的なレベルの日本語学習者への教育に対応するような内容の支援を担うようなライティングセンターも必要になってくる)。

あるいは、アカデミックジャパニーズの獲得といった初年次の留学生のライティング支援に焦点をあてた場合には、一対一の形態が通常であるライティングセンターをグループワーク中心にし、連携している授業の受講生の中から日本人学生をチューターとして選出し(あるいは、その授業の受講生からでなくとも、メンターとなっている学生でもよい)、彼らがチューターをつとめるライティングセンターでの指導の利用を初年次留学生に義務づけても良い。こうした形でのライティングセンターの利用は、ライティング支援になることはもちろん、協調性を学び、また留学生と日本人学生の交流を促し、リテンション率の向上といった初年次教育の目的に大きく寄与するものになりうるからである。

さらにより高いレベルの日本語ライティングの支援、すなわちサプリメント・インストラクションやあるいは従来のライティングセンターの典型的な活動(レポートの構想から内容の推敲等)、あるいはキャリア教育などを行う場合には、やはり大学院生がチューターとして適しているだろう。ただ、たとえ大学院を設置していない大学であっても、麗澤大学が実践していたように、大学の行っている公開講座の受講生の中からチューターにふさわしい人材を集め、留学生の指導にあたらせるという方法でこのような指導は可能になる。またこれらは決して消極的手段ではなく、社会経験

の豊富な地域の方々からの指導や彼らとの交流は、日本での就職などを望む留学生にとっては、非常に得るものの多い意義深いものとなるはずである。

6. 結語

日本におけるライティングセンターの歴史はまだ浅く、特に留学生に対する支援を実施しているところは更に限られた数しかない。本稿では、その数少ない後者のライティングセンターに聞き取り調査を行い、それらの情報からライティングセンターの今後の留学生の支援のあり方を考察した。アメリカで培われてきたライティングセンターの基本理念を継承することは重要であるが、その一方で、日本の教育事情、あるいはそれぞれの大学に合わせて、センターの運営方法を決定していくこと求められる。そのためには、まずライティングセンターの役割、すなわち、ライティングのどの段階への支援に焦点をあてるのかを明らかにし、また書き手だけでなく、チューター側の教育効果も考えることなども重要である。また、時には、これまでに培われて来たライティングセンターの理念も柔軟に変えていく事も必要であろう。本稿での考察が今後のライティングセンターの発展に少しでも貢献するものになれば、幸甚である。

参考文献

- 加藤善子「新しい学習支援―「リメディアル」を超えて」高等教育研究センターニューズレターNo.22, 2013 <http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/news/newsletter/> (2014/1/4 閲覧)
- 川嶋太津夫「初年次教育の意味と意義」『初年次教育―歴史・理論・実践と世界の動向』1-12 頁, 2006
- 佐渡島沙織「自立した書き手を育てる: 対話による書き直し」『国語科教育』66, 11-18 頁, 2009
- 佐渡島沙織『文章チュータリングの理念と実践―早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房, 2013a
- 佐渡島沙織「大学ライティングセンターを利用する書き手たち―国語科教育から見た日本におけるライティングセンターの役割」シンポジウム「ライティングセンター日本の現状と課題」発表資料, 2013b
<http://w3.kansai-u.ac.jp/renkeigp/news/2013/12/25316kaisai.html> (2014/1/4 閲覧)
- 正宗鈴香「留学生を対象とした文章表現科目におけるライティング支援室の位置づけ―「書く」プロセス学習とライティング支援室の役割領域の視点から―」『麗澤大学紀要』95 巻, 93-120 頁, 2012
- 安永悟「久留米大学における実践―導入教育を目的とした「共通演習」を通して見えてきたこと―」『リメディアル教育研究』1(1), 10-21 頁, 2006
- 山田礼子「導入教育の実態―学部長調査の結果から(中間まとめ)・1-1」『アルカディア学報(教育学術新聞掲載コラム)』2119 号, 2003
<http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0134.html> (2014/1/4 閲覧)

吉田弘子・Johnston, Scott・Cornwell, Steve 「大学ライティングセンターに関する考察-その役割と目的-」『大阪経大論集』第61巻 第3号, 99-109頁, 2010

Tinto, Vincent “Dropout from Higher Education: A Theoretical Synthesis of Recent Research”,
Review of Educational Research Vol.45, No1, pp.89-125, 1975

Abstract

Recently in Japan, many universities have been starting to establish Writing Centers for assisting students' writing outside their classes. Writing Centers have a long history in United States and almost all universities in the U.S. have the centers, which share basic principles and common styles. Meanwhile in Japan, many universities realize the necessity and educational effect of Writing Centers. However, not having enough knowledge and experience about the centers, they are still wondering how to operate them. In regards to that situation, I conducted a detailed interview research with three writing centers in Japan and considered how to manage the centers, especially the one for Japanese learners. As a solution I insist that inheriting the principle or management system of the Writing Centers developed in the U.S. is important but we also need to adjust them to match with Japan's present situation of higher education.